

他者を知覚し自己を知覚する
— 個が分断される都市における他者とのつながり —

22018029 氏名 坂本桃佳
指導教員 宮晶子 教授

他者と自己	触感	皮膚
感覚	都市	拡張

1. 背景と目的

自然の中に身を置くと、太陽の光や風、木々のざわめきなどが“環境”となって身体を感じさせることで自己を知覚させる。それにより、私は周囲と分断されずにつながりを持つ。(図1)

一方で、都市においてはどうか。人よりはるかに大きなビルが並び、均質に整えられた街並みが疎外感や冷たさを感じさせる。そして都市という全体に対して、そこにいる個々人の存在は突き離され分断されているように感じる。それにより、他者の存在を感じにくく、関わりが希薄になっていると考える。(図2)

都市においては他者の存在が“環境”であり、それを感じられなくなったら、人は自分の存在さえも明確に感じられなくなってしまい、不安に陥ってしまうのではないだろうか。

そこで本制作では、都市においても周囲とつながりを持ち、自己を知覚できる都市住宅を考案し提案する。

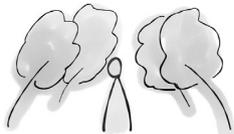


図1 自然のイメージ

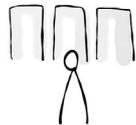


図2 都市のイメージ

2. 触感と「ふれる」

テクニカルなモノに触った時の触感だけでなく、視覚、聴覚、言語、記憶が絡み合って感じられる総合的な感覚を「触感」としている。これをふまえ、本制作では触感をつかう物理的な触れただけでなく、対象となる人やモノに触感的に感覚を通して関与すること全体を「ふれる」と呼ぶこととする。



図3 皮膚<服<建築<都市のイメージ

環境のなかに人が存在するとき、自分の身体とそうでないものの境界である皮膚から、皮膚<服<建築<都市と感覚を拡張していくことで個人と都市が繋がったように感じられるのではないかと。(図3)

このとき人は触感的に「ふれる」ことにより、自己でないものの存在を確かめつつ自己を知覚すると考える。

3. 他者を感じる

都市において自分の存在を確かめるためにはどうすべきか考察していく。

河野哲也氏は『境界の現象学』で、自分が自分であると認識するための自己統合について以下のように述べた。

「触覚では、右手が左手に触れる場合のように、触られつつ触るという二重感覚が成立する。(中略)ところが、視覚においては、見られつつ見るという経験が生じない。」

したがって、触覚においては「触れる—触れられる」の循環関係を自己完結できるが、視覚的に自分を認識するには視線について理解する必要があるとしている。そして、「他者の視線を理解するとは、見ている他者の身体に共感し、その見るという行為、そのひとが首を向け、眼を凝らし、焦点を合わせている様子と見えている光景の関係性を理解することである。」と述べている。つまり、ただ見るのではなく、その対象に意識を向け他者からの視線から自分を捉えることが必要だとしているのである。したがって、都市においては他者と「見る—見られる」の関係を持つことによって、自己を認識できるため、それを引き起こす空間が必要と考える。そうして他者の存在を感じることで感覚が拡張され、自分ではないものを意識することで自分の存在を確かめることができるのではないだろうか。

4. 感覚の拡張

自分と都市が繋がったと感じた体験から感覚が拡張される空間について考察していく。普段、池袋駅を利用する際は忙しなく落ち着かないように感じる。しかし、雑司が谷鬼子母神近くの喫茶店から池袋駅まで歩いた時は違うように感じられた。小さくて落ち着く場所から鬼子母神のけやき並木に出て石畳の道を歩き、明治通りに出て池袋に近づくに連れて徐々に身体感覚が広がり、池

袋駅に着いた時には疎外感ではなく自分とまちがつながったように感じられた。その過程で、「ふれる」対象が、コーヒーカップ、けやき並木、高層ビルというようにスケールアップすることで意識の及ぶ範囲が段階的に拡張していく。(図 4) このことから、感覚の拡張を引き起こすには対象を段階的に拡大していくことが必要と考える。

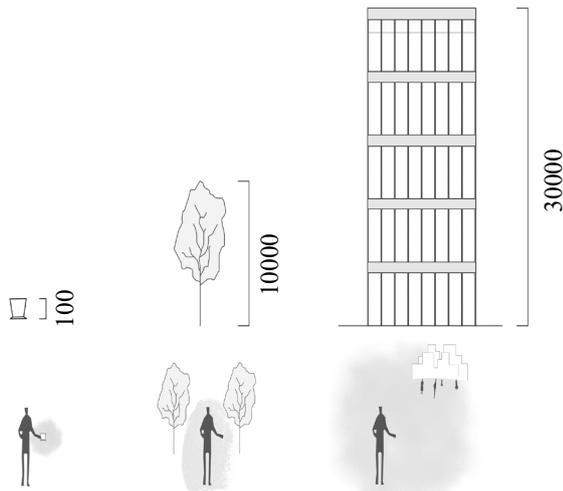


図 4 意識の範囲とスケール

5. 実存的空間

ここで、段階的拡張がおこる空間について、クリスチャン・ノルベルグ＝シュルツ氏による『実存・空間・建築』を引用する。本文献では実存的空間の諸要素は段階によって現れるとしている。最小の段階から順に、器物、家具、住居、都市、景観、地理とヒエラルキーが構成される。そして、「諸段階の体系、各段階で発達するいろいろなシエマ、段階の間に働く相互作用、これらが実存的空間構造を構成するものである。」と述べている。また、「都市的段階では、個人が、より『私的』色合いの濃い実存的空間を所有しているのがふつうであるが、それは、より大きな全体の中の一部として理解されることが絶対に必要なのである。」と述べられている。都市と個人の家を切り離すのではなく、段階の間に相互作用を引き起こし、街からホームとしての家がつながったように感じられることが重要であると考えられる。

6-1. 設計提案

都市に放り出されたとき、突き放されるのではなくその一部であることを実感し、他者の存在を肯定することで自己を知覚できるような都市住宅を提案する。「ふれる」ことで他者の存在を感じ自分の存在を確立できるようにし、環境と感覚の相互作用により実存の意識を持てる設計を目指す。

6-2. 敷地

前述の体験をふまえ、敷地は南池袋とする。池袋は東京の主要都市であり、ビルなどの大きな建物が雑多に並び行き先を見通すことが難しく、自分の居場所がわからず迷いやすい場所である。そのなかでも明治通り沿いのビルに挟まれた一面を対象とする。(図 5) 西側をビルが立ち並ぶ明治通り、東側を細い路地と住宅街に挟まれ、東西で異なる特徴をもつため、前述の感覚の拡張を引き起こすために適した場所と考える。



図 5 敷地周辺地図

6-3. 設計手法

触感によって他者の存在を感じることができ、実存の意識をもち自己を知覚できるようにするために、都市と自分の家を切り離すのではなく、つながったように感じられる設計手法を展開する。

全体の計画は建築内部に立体的な中庭をつくる。(図 6) これにより、住む人々は他者と「見る－見られる」の関係をもち自己を知覚する。また、高層建築では全体像を把握することが難しいが、それを俯瞰し空間構造を理解しやすいようになり、意識を拡張できるようにする。

この提案により、個が分断されず他者を感じることで、自己を知覚しその存在を実感できることを期待する。

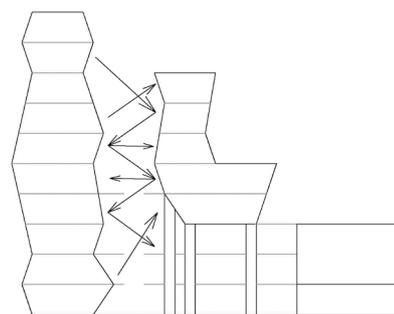


図 6 断面ダイアグラム

主要参考文献

- (1) 仲谷正史／寛康明／三原聡一郎／南澤孝太『触樂入門—はじめて世界に触れるときのように』朝日出版社 2016 年
- (2) 河野哲也『境界の現象学』筑摩書房 2014 年
- (3) クリスチャン・ノルベルグ＝シュルツ『実存・空間・建築』鹿島出版会 1973 年